

ゆだね、信頼し、ほほえもう！

扶助者聖マリアの会（ADMA）創立 150 周年にあたって  
1869 年 4 月 18 日～

2019 年 4 月 18 日 ローマ  
聖木曜日

「イエスキリストにおける、わが愛する子どもたちへ、  
私がどれほどあなたがたに会いたい、あなたがたの中にいて、私たちの心にかかっていることについて話し合い、私たちが互いに抱いている信頼のうちに慰めを見いだしたいと、私がどれほど願っているか、主はご存じです。しかし、愛する子どもたち、残念ながら、体力の衰え、前の病気の後遺症、あたらなければならぬフランスでの大切な仕事のため、少なくとも今は、あなたがたへの愛情のままに従って動くことができません。  
そのため、あなたがたと共にいられないので、この手紙を送ります。私があなたがた皆のことを思い起こしているのを、きっと喜んでくれることと思います。あなたがたは私の希望であるように、私の誇り、支えでもあるのです。したがって、あなたがたが日々、神のみ前で熱意と功德において成長するのを目にしたいと願っている、あなたがたの奉仕職がますます豊かな実を結ぶものとなるよう、最良の手段と私が思ういくつかのものを、たびたびあなたがたに提案するのを疎かにしないようにしようと思います。」<sup>1</sup>

私は自分の言葉ではなく、我らが愛する父の言葉で、そして、1885 年に父が息子たちにあてて書いたときと同じ愛情と大きな心をもって、この手紙を始めたいと思いました。全サレジオ家族の愛する兄弟姉妹の皆さん、同じ親しさに満ちた心で、皆さん一人ひとりに言葉を届けたいと願っています。扶助者聖マリアの会（ADMA）創立 150 周年にあたり、そして 1 年後の、ヴァルドッコの扶助者聖マリア大聖堂献堂 150 周年にあたり、この手紙をしたためながら、そうして我らが父を特別に思い起こしながら。

教皇フランシスコは私たちに思い起こさせます：「聖ヨハネ・ボスコの記憶は教会の中に息づいています。ドン・ボスコは、サレジオ修道会、サレジアン・シスターズ、サレジアニ・コオペラトリー、扶助者聖マリアの会の創立者として、そして現在のサレジオ家族の父として思い起こされます。」<sup>2</sup> 実際、私たちの父の直観から、150 年前の扶助者聖マリアの会の創立と扶助者聖マリアにささげられた大聖堂献堂の出来事は結び合わされたのです。この記念の年は、この書簡を書くに十分な正当性を与えてくれると思います。これは私の前任者たちによる書簡を踏襲するものであり、ドン・ボスコを生涯にわたって導いた神の母への同じ愛を、私たちの心にも再び息づかせる助けとなるでしょう。キリスト者の扶けマリアがおられなかったなら、私たちは違うものになっていただろうと、私たちは思い起こすのです。たしかに、サレジオ会、サレジオ家族にはなっていなかったでしょう！

<sup>1</sup> G. BOSCO, *Circolare ai Salesiani sulla diffusione dei buoni libri*, in ISS, *Fonti . Don Bosco e la sua opera*, LAS, Roma 2014, p. 481. ジョヴァンニ・ボスコ, 良書の普及について、サレジオ会員への書簡

<sup>2</sup> フランシスコ, ドン・ボスコのように、若者と共に、若者のために。教皇フランシスコの手紙。聖ヨハネ・ボスコ生誕 200 周年にあたりサレジオ修道会総長アンヘル・フェルナンデス・アルティメ神父にあてて、最高評議会報 421 英語版 p 104.

今年、サレジオ会の活性化のため世界各地の多くの国を訪れた中で、私にとって最も美しい体験の一つだったのは、聖霊が興し、支え続けてくださるサレジオ家族のすばらしい状況、中でも、キリスト者の扶けマリアに献身するグループや人々が強められているのを知ったことでした。世界の最も遠隔の地でこのグループに出会うことは、私にとって大変感動的でした。青年 ADMA を立ち上げた多くの若者と知り合うことは、とても感動的でした。若者たちは、ドン・ボスコ自身が大変愛した我らが母への信心のこの美しい表現に、自らのビジョンと働きをもって意義のある貢献をしたいと願っています。また、想像もできないようなところ、この4月にも再び訪れますが、例えばボロロ族の人々の土地を訪れることができ - そこは二人の兄弟、ルドルフ・ルケンバイン神父とインディオのシマオ・クリスタオン・ボロロの殉教の地です - 男性、女性、若者から成る立派な ADMA のグループと出会うとき、私は心を揺さぶられます。メンバーの皆さんは、その聖なる地でミサの終わりに、自分たちの民族の言葉でキリスト者の扶けマリアに歌いました。この母が告げ知らせた栄光は、遠くこの地にも届いているのです：「ここは私の家、私の栄光はここからさし出でます。」<sup>3</sup>

私たちが確信していることを精査し、ドン・ボスコのキリスト者の扶けマリアへの信心を注意深く見直し評価を行いながら、私たちの召命のマリア的な側面を新たにしよう招いたのは、第21回総会でした。間違いなくこれは、「私たちの家に、聖母のための場所を用意しましょう」<sup>4</sup>というエジディオ・ヴィガノ神父の呼びかけに、私たちの時代にあって応えるため、世界中の全サレジオ家族にあてた有意義な提案にもなるでしょう。

私たちの家がますますキリスト者の扶けマリアの家となることを願いながら、この先のページでは、聖体とマリアへの私たちの愛着について、簡単な考察を提供したいと思います。この150年間たどられた道のり、守られるべき宝として私たちが受け継いできたサレジオのカリスマの庶民的特質、そしてマリアの家から私たちそれぞれの家庭へとたどられるべき道についてです。<sup>5</sup>

この足跡をたどりながら、私たちもまたドン・ボスコが歩んだ道を忠実にたどっていると知ること、また私たちがよく知っているように、神の母への信心が、ドン・ボスコの霊性全体の特別な特徴であり、そこに深くしるしを刻んでいることは、私にとって大きな喜びです。

## 1. 聖体とキリスト者の扶けマリアに結ばれて

「トリノのキリスト者の扶けマリアにささげられた教会で、トリノ大司教認可のもと、教会法にのっとり、マリアに抛り頼む人々の会が創立された；……その会員は、救い主の聖なる母の加護を人生において、特に臨終の時において頂くため、聖母の栄光を促進することを旨とする。会には特に二つの目的がある：……聖母への信心を広めること、そして聖体におられるイエスの崇敬である。」<sup>6</sup>

これは、扶助者聖マリアの会 ADMA の創立にあたり、ドン・ボスコによって書かれた会則の冒頭の言葉です。会はドン・ボスコによって創立され、1869年4月18日にトリノのア

<sup>3</sup> 参照 メモリエ・ビオグラフィケ II, 191.

<sup>4</sup> E. VIGANÒ, *Mary renews the Salesian Family of Don Bosco (letter published in ACS n. 289)* 最高評議会報 289, 総長書簡『マリアはドン・ボスコのサレジオ家族を新たにされる』.

<sup>5</sup> この150周年の初めに皆さんが行った考察の実りとして提供された貴重な貢献のために、この場を借りてヴァルドッコのサレジオ会員、FMA 会員、ADMA の会員に感謝を表したいと思います。

<sup>6</sup> *Letture Cattoliche*, Anno XVII (Maggio), Fasc. V, pp. 48-50.

レッサンドロ・リッカルディ大司教の認可を得ました。その150周年を私たちは祝っています：「本会は、若者、特に最も助けを必要とする若者への優先的な愛の卓越した模範です。」<sup>7</sup>

今年、創立記念日が聖木曜日に当たるのは意味深いことです。聖体の崇敬が、キリスト者の扶け無原罪のマリアへの信心とともに、いかに会の霊性と生活の根本であるかを思い起こさせます。それはサレジオの教育法と霊性の二つの柱を指し示します。ドン・ボスコの人生の主であるキリストは、何よりも、聖体のうちに生きて現存されるイエスです。いのちのパン、神の母、教会の母であるマリアの御子です。ドン・ボスコはこの現存によって、この現存のうちに生きました。いけにえ、秘跡である聖体、私たちが養われる聖体、まことのあがめるべき現存である聖体は、ドン・ボスコの人生において力、なぐさめ、平和の生ける源泉、同時に、活動の力の源でした。自らの、また少年たちの成長への歩みにおいて、聖体なしに聖性の道はありません。聖体は、神の愛への心の根本的な回心の、重要な鍵です。サレジオの精神において、キリストの首位性は、聖体の観想への際立った感性と聖体への愛をもって生きられます。

## 1.1. 聖フランシスコ・サレジオの足跡に従って

ドン・ボスコは、マリアにささげられた会を創立することにしたとき、キリスト者の扶けマリアに“信心をささげる”会員を想定しました。古めかしく、昨今ではいづらか流行らないものになっているこのささやかな言葉は、ドン・ボスコをキリスト者の扶けに結ぶ絆の、燃え立つ心に分け入る鍵です。「まことの信心」は第一に、何よりも、神への愛に関わると、聖フランシスコ・サレジオは教えています。実際、まさに私たちが神から頂く真の愛（恵み）のために、私たちが神の恵みに応える（愛徳）ことができるようになるのです。そのため、「信心をささげる人々」は、聖性の道を「飛んでいく」人々です。「まことの信心」は、あらゆる行い、あらゆるわざを、最も小さなものから最も大きなものに至るまで、その人のうちに完全なものとするからです。「信心をささげる人々」を、教会におけるそれぞれの召命と使命にしたがって、より親しみやすく感じの良い、より勇気のある、自己贈与の心構えのある者とするのです。<sup>8</sup>

実際、聖フランシスコ・サレジオは、「信心生活入門」という副題を付けた『*Philothea*』を書きながら、大きな喜びと霊的な深みのあるキリスト者の道を提案します。その生き方において、信心は決して信心主義ではありません：それは「愛徳として生きられる聖性」です。聖フランシスコ・サレジオはこの件について明確に見解を述べています：「信心はほかでもなく、あの霊的に目覚めた、生き生きとした状態であり、時を移さずに心を尽くして愛徳に協力するようにさせます。」<sup>9</sup> 注意深く読むとき、信心の主演がイエスであることを私たちは理解します。イエスは愛 - 愛徳 - をもって「私たちのうちに働かれ」、「私たちがその愛徳のうちに働く」ようにさせます。したがって、信心深いということは、習慣的な愛徳の姿勢を身につけることができるということです。それは、イエスが私たちに与えられる照らしにすぐに従うことができるよう、少なくとも心の奥底で常にイエスのうちに身を沈めているとき、はじめて可能になります。

信心をささげる人々について説明しながら、聖フランシスコ・サレジオは述べます。「この人たちは天使のような心をもった人間、あるいは人間の身体をもった天使である；若くなくとも、活力と霊的な機敏さにあふれている；祈りによって飛翔する翼を与えられていて、神のもとにさえ昇るが、慈愛に満ちた聖なる対話のうちに人々と共に歩む足をも持ってい

<sup>7</sup> ヨハネ・パウロ二世、若者の父 *Iuvenum patris* (聖ヨハネ・ボスコ帰天百周年にあたっての教皇より聖フランシスコ・サレジオ修道会総長エジディオ・ヴィガノ神父への使徒的書簡、ローマ、1988年1月31日)。

<sup>8</sup> 参照 フランシスコ・サレジオ、*信心生活入門 Philothea* I,1,4; 3,13。

<sup>9</sup> 同上 I,1,9。

る；その人々の顔は美しく、朗らかである。なぜなら、すべてを甘受し、柔和に受けとめるからである；その足と手、頭は覆われていない。思い、心情、行いに、神を喜ばせることをおいてほかに目的がないことを示している。体のほかの部分には美しく軽やかな服をまとっている。なぜなら、自らの状況に厳密に必要なもののみを取って、この世と地上のものを清く誠実に身につけるからである。」<sup>10</sup>

これは、エウジェニオ・チェリア神父の言葉を再び聞くかのようです。チェリア神父はドン・ボスコがどのように神との一致を生きていたか語っています：「実際、これは、ドン・ボスコが特別に受けている賜物のようであった。取り組まなければならないことがどれほど多く、重大で、間断なくあったとしても、主への愛に満ちた思いから気のそれることは決してなかった。」<sup>11</sup> ドン・ボスコの生涯のあらゆる活動は、何をしているときでも、祈りであったと、チェリア神父は締めくくっています。

信心は高きを望む道、聖性の根本とサレジオのカリスマに向かう道であり、あの「快活であること」を意味し、私たちは今、地上でそれを生きようように努めることができ、そして永遠に天国でそれを味わうことができます。当然、そのようなすばらしい計画は、一方では私たちを魅了しますが、他方では、その端緒につくのをためらわせるほど恐れをいだかせます。このありうる誘惑に対して、聖フランシスコ・サレジオは厳しく臨み（参照『神愛論』）、信心の目標である他者と神への愛が、単なる提案ではないことを思い起こさせます：それは命じられた任務なのです！ まさに高すぎる目標だと考える誘惑に私たちが陥り、落胆して信心生活に取り組むのをあきらめてしまうようなことがないよう、命じられた掟となっているのです。

私たちの限界や弱さを知っていたドン・ボスコは、さらに美しい一歩を進めました：私たちはただ一般的な信心をささげる者なのではなく、キリスト者の助けマリアに信心をささげる者なのです。私たちを御父と御子に結び、行動（愛徳）へと駆り立てる愛の賜物はマリアの母なる仲介を経るということを、ドン・ボスコはあたかも手で触れられるほど生き生きと経験していました。事実、ドン・ボスコの生涯を通して、おとめマリアの存在は、御父から受けた使命を遂行するためのたゆみない導き、9歳の時の夢でイエスに命じられたように、愛をもって若者を教育するすべを教えてくださいる賢明な師、守りとなぐさめ、聖霊の力を容易に頂くことのできる、逆境の時の安全な港であったのです。

## 1.2. 天国への道のり

聖ルイ＝マリ・グリニョン・ド・モンフォールは『聖母へのまことの信心』に書いています。マリアがあらゆる被造物の中でイエス・キリストに最も「かたどられている」ので、言い換えれば、マリアがイエス・キリストに最も似ていて、最も近いので、子どもたちの恵みのうちに歩む生活において、マリアは特別に仲介をすることができると。基本的に、とモンフォールは続けます、「まことの信心」はほかでもなく「洗礼の誓いと約束を余すところなく新たにすること」<sup>12</sup>であると。それは、悪と罪を棄て、キリストに全面的に結ばれることを意味します。洗礼の約束を果たす道のり、私たちは、マリアを愛すれば愛するほど、マリアに愛していただくようにすればするほど、マリアは、私たちが聖霊によってイエスにかたどられるよう、ますます導いてくださいます：この母は、ご自分のもとにとどまらせようと息子や娘たちを呼ぶのではなく、御子イエス、父なる神の子との出会いへと「手を取って」導いてくださると、私たちはよく知っています。

<sup>10</sup> 同上 I,2,8.

<sup>11</sup> E. CERIA, *Don Bosco con Dio*, SEI, Torino 1929, p. 209.

<sup>12</sup> 参照. ルイ＝マリ・グリニョン・ド・モンフォール, *聖母へのまことの信心*, III, 1, 120.

そのため、私たちは今年のス trenna に一致して言うことができます。私たちが聖性の道を“飛ぶように”行くために、マリアは私たちを支えてくださる母、先生であると。洗礼の賜物を根本的に生きる、マリアと共にキリスト者の召命を生きるという、この単純ですべての人に開かれた呼びかけのうちにこそ、ADMA の信徒性、社会で暮らすのふつうの人々に開かれたものであるという特徴があります：メンバーは、洗礼を受けた一人ひとりが求められる以上のことは、何も求められません。違いは、「まことの信心」に根ざす「さらなる一歩」にあります。すなわち、マリアとの効果的な、心に響く愛のやりとりである「まことの信心」です。それは私たちを、神への愛、隣人への愛においてたゆみなく成長するようにさせます。

この観点から、マリアとの霊的關係は直接的で親密、永続的なものではありませんが、「孤立したもの」ではなく「満ち満ちたキリスト者としての生き方に向かうもの」であることが、明確になります。「[...] 私たちの母でもある主の母との絆、自分を明け渡し、聖母の使命のためにいつでも応える姿勢から成るこの絆は、キリストへの、成熟した堅忍する応答へと至らせ、キリストを通して、聖霊のうちに、御父へと至させます。」<sup>13</sup> 愛だけが - ドン・ボスコがよくわかっていたように - 人生の旅路を進む翼を私たちに与えてくれるのです。まさに、マリアとマリアに「信心をささげる者」の間の相互愛こそ、それぞれが暮らし働くあらゆる場にもたらすよう、ADMA のメンバーが呼ばれている賜物です。それは真正な呼びかけであり、キリスト者の召命を生き生きと力強く生きるようにとの招きなのです。

このことは、私たちの心が神への愛に、またマリアへの愛に満たされているとき、はじめて可能になります。その意味で、ドン・ボスコは真の模範です。ピエトロ・ブロカルド神父は次の言葉でこのことを指摘しています：「神に満たされていた聖なる人、ドン・ボスコは、同時に、マリアに満たされていた聖人です。実際、ドン・ボスコの全生涯は、神と共にあって神に拠りたのむことを中心に、マリアという軸を回るものでした。9 歳のときの夢以前にも、マリアは聖なる地上の母を通して、すでにドン・ボスコの人生において生き生きとした存在でした：『ジョヴァンニーノや……お前がこの世に生まれてきたとき、私はお前を聖母に奉獻したのよ。』イエスはジョヴァンニに言います。『私は君のお母さんが日に三度あいさつするようにと教えた、あの方の息子なのだ』と。」<sup>14</sup>

ドン・ボスコのマリアに関わる体験をあらためて見るとき、マリアがキリスト者の生き方のあらゆる基本的な側面において、いかに模範、先生となりうるかに私たちは気づきます。ここで、それを簡単に見ていきましょう。

### 1.2.1. マリアは天の<sup>うたげ</sup>宴に招いてくださる

ドン・ボスコの体験において、マリアへの愛と聖体への愛は常に一つです。この二つの愛は、教会のいのちと使命を支える二つの柱です。ドン・ボスコの数々の夢から特別に見いだすことのできるマリアのイメージにおいて、マリアは、挑戦に満ちた人生の旅路の終わりに若者たちを待つ、そして天の宴にあずかるよう招いてくださる貴婦人あるいは女王として現れます。家の良い女主人として、マリアは細やかな心配りですべてをととのえ、客を迎えます。天の宴は、絶えずそれを待ち望み、それに備える聖体祭儀の宴のように、完全な交わりの中です。神との、また私たちの間の交わりは、キリスト教信仰の究極的な目的です。私たちが御父との交わりに再び入ることができるよう、イエスはご自身を十字架上でささげられます。イエスは、私たちがイエスと一つになれるよう、パンのうちにご自身を差し出されます。同じように、キリスト者の助け聖マリアに「信心をささげる者」は、自らのいのち、喜

<sup>13</sup> S. DE FIORES, *Maria nella vita dello Spirito*, Cirié (Torino) 2003, pp.149-151.

<sup>14</sup> P. BROCARDO, *Don Bosco. Profondamente uomo profondamente santo*, LAS, Roma, 2001, p. 127.

びや苦勞をささげつつ聖体祭儀の主役となるよう招かれています。交わりが成長するために：家庭で、職場で、教会共同体で。

### 1.2.2. 知恵を教える師であるマリア

マリアは、9歳のときの夢以来、知恵を教える先生としてご自身をドン・ボスコに示されます。福音記者ルカは、あらゆることを心にとどめ思い巡らす賢明な女性としてマリアの姿を描きます。実際、聖書的な知恵とはまさに、日々の生活の中で聞こえる神のみ言葉に注意深く耳を傾けることのできる力とされています。マリアは預言者です。なぜならマリアは、聞く心、現実から学び、現実のうちに神の介入と神の救いのしるしに気づくことのできる心を持っておられるからです。ドン・ボスコのマリアの夢の中で、マリアはしばしば民衆と共にある女性：実際的で活動的、生活の経験によって賢明さを培った女性としてご自身を示されます。マリアは体験から出発するよう、そして抽象を避けるため、弟子たちの知性に働きかけるため、体験を基にするようドン・ボスコに教えます。ドン・ボスコのマリアのイメージにマンマ・マルゲリータが与えた影響はこの点で明らかです。キリスト者の扶け聖マリアに「信心をささげる者」は、マンマ・マルゲリータのように、それぞれの生活において、乗り越えなければならないさまざまな出来事を受けとめる温順さにおいて、預言者でなければなりません。体験したことを大切にそこから汲み、一步一步、聖霊に導かれるためです。預言者であるのは、第一にあかし人であるから、そして、教育者として、他者に寄り添い、人生の道のりを共に歩むことができるからです。

### 1.2.3. マリア、悪に立ち向かう力強い助け

マリアはしばしば、女王としてご自身をドン・ボスコに示されます。トリノ、ヴァルドッコの大聖堂の壮麗な扶助者聖マリアの祭壇画もそのようにマリアを描いています：莊嚴さに包まれ、天の宮廷の臣下に囲まれ、冠をかぶり、手に<sup>しやく</sup>笏を持っています。我らが創立者の作った短い祈りの中で私たちが今日も唱えるように、「力ある」女王です。しかし、王権はマリアの特権ではなく、洗礼のときに頂く賜物であり、私たち皆がこれにあずかるよう呼ばれています。マリアは、腕に抱く幼な子イエスから直接その力を頂きます。その力は、特に<sup>いにしえ</sup>悪との闘い、罪との闘いにおいて表れます。マリアは、そのお子がやがて古のへびの頭を砕くこととなる、おとめです。ドン・ボスコはしばしば説教の中でこのことについて強調し、また私たちが子としての愛情をこめてマリアを呼び、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」（ヨハネ 2・5）というマリアの勧めに従うとき、マリアはずばやく介入されるということを強調しました。なぜならマリアは、ご自分の子どもたちの人生において、絶えず介入されるからです。このことを確信しつつ、キリスト者の扶け聖マリアに「信心をささげる者」は、日々の悪との闘いにおいてマリアの女王としての力にあずかるよう呼ばれています。家庭、共同体、民族の生活・歩みの最も暗い時にあっても、希望の光を輝かせながら。

## 2. 150年の旅路

ドン・ボスコとその聖性の特徴の中に、創立者であるという特徴があります。すなわち、教会において、ほかの聖なる創立者たちと区別される、固有の聖性と使徒的活動の一派を始めた人であるということです。「ドン・ボスコは新しく魅力的な、真の使徒的靈性の一派を立ち上げました；キリスト者の扶け、教会の母であるマリアへの特別な信心をドン・ボスコ

は広めました（…）そして、若者、中でも特に最も助けを必要とする若者への優先的な愛の優れた模範でありました。」<sup>15</sup>

天からの恵みとするしに伝えたいと望み、また若者のための事業に一貫性と継続性を持たせたいと願ったドン・ボスコは、新たな使徒的働きを立ち上がらせるようにという神の呼びかけを聞き取ります。サレジオ修道会創立のちょうど 10 年後、扶助者聖マリア大聖堂献堂の翌年、ドン・ボスコは扶助者聖マリア信心会を創立しました（1869 年 4 月 18 日）。

このことは、「マリアが、地上で始められた『教会の母』、『キリスト者の扶け』という使命を、天からも最高の成果をもって続けて来られたことを、ありありと目の当たりにさせてくれます。」<sup>16</sup> 天に上げられた最も聖なるマリアは、ご自分の役割を果たすのをやめることはありませんでした。むしろ、最も効果的にそれを果たしつづけておられます。マリアは私たちと共に生きておられ、教会の歴史、人類の歴史において、恵みの仲介者という母の使命を、子どもたちのために果たしつづけておられるのです。

ドン・ボスコが、彼自身の道として、また教会のものとしてこのマリアの道を歩んだと考えるのは当然のことです。ドン・ボスコの内面生活も、司牧生活も、飾らない素朴なものでありながら深いマリア的な感性にあふれていたからです。ドン・ボスコのマリアへの愛と信心は、生涯を貫いて断たれることのなかった糸、たゆみない拠りどころ、さまざまな個人的経験に始まり、また教会の出来事によって、調えられ、発展し、成熟した、ドン・ボスコの生きた信仰体験であったと、確かに言うことができるでしょう。ドン・ボスコは、キリスト者の扶けマリアが共におられるという明確な自覚を持っていました。それはドン・ボスコが感じ、非常に具体的に体験した現実であり、私たちはそれをあえて「客観的」と言うことができるほどです。

その後継者、福者ミケーレ・ルアが伝えているように、ドン・ボスコは、異なるさまざまな場でサレジオ修道会の創立について語る際、キリスト者の扶けおとめがサレジオ修道会の「創立者」であり、また「支え手」であるという自らの確信を表明しました。そして確かなこととして述べています。「我々の会は大いなることを果たし、世界中に広がるでしょう。サレジオ会員が最も聖なるマリアによって与えられた会憲に、いつの時も忠実でありつづけるなら。」<sup>17</sup>

この 150 年をふり返って見るとき、ドン・ボスコとキリスト者の扶け聖マリアの大いなる、切り離すことのできない結びつきは、その最初から明らかです。この結びつきは、サレジオ会員にとってはカリスマへの忠実の表現となるほどであり、サレジアン・シスターズにとっては人生・生活が「キリスト者の扶けの生ける記念」となる保証です。そしてドン・ボスコは、その信心が教會的なもの、中でもサレジオの靈性に根ざしたものであること、その信心をささげる御母は常に揺るぎない支え手であると、ADMA のすべてのメンバーに確証しています。

ルア神父自身、別の書簡で書いています。「私には何の疑いもありません。サレジオ会員たちのうちにキリスト者の扶けマリアへの信心が増せば増すほど、ドン・ボスコへの尊敬と愛情は大きくなり、ドン・ボスコの精神を保ち、その徳に倣おうとする決意も増すでしょう。」<sup>18</sup>

## 2.1. マリアの仲介により神の道具であるという意識

<sup>15</sup> ヨハネ・パウロ二世、若者の父 *Iuvenum Patris*, 最高評議会報 325 p.11: 斜体は筆者によるもの。ドン・ボスコの靈性のマリア的側面を強調。

<sup>16</sup> G. BOSCO, *Meraviglie della Madre di Dio invocata sotto il titolo di Maria Ausiliatrice*, Torino 1868, p. 45.

<sup>17</sup> M. RUA, *Lettere circolari*, Torino 1965, 178, pp. 293-294 ss.

<sup>18</sup> M. RUA, *前掲書*, p. 353.

ドン・ボスコ自身が歩んだ信仰の道に目を向けることなく、ドン・ボスコとその事業について語ることはできないでしょう。ベッキ神父の言葉を私もここで繰り返したいと思います。これは、後ほど描き出すこととするドン・ボスコのたどった道の特徴を、大変よく語る言葉だと私は思います。ベッキ神父は書いています。「教条的に断定しないようにしながらも、次のように言うことができるでしょう。ドン・ボスコはある事業の責任者として建設を始め[これは扶助者聖マリア大聖堂の建設に関連して語られています]、大いなる運動のカリスマを担うリーダーとして、それを完成させました。その運動はまだ初期の段階にありましたが、すでに明確な目的や特徴を備えていました；彼はトリノの司祭として歩み出し、教会の使徒として建設を完成させました。ドン・ボスコはこの町から世界へと進み出たのです。」<sup>19</sup>

より大きな教会が必要だと、1863年にはドン・ボスコは感じていました。ヴァルドッコの聖フランシスコ・サレジオ教会はサレジオ会員と少年たちにとって手狭になっていました。その4年前、「小さな核」として修道会は誕生していました。それは時と共に大きく広がるものの始まりであると、あらゆることが示唆していました。ドン・ボスコがマリア・マザレロと出会ったのもその翌年(1864年)であり、それはサレジオのカリスマが女性の世界に広がる、その始まりを記す出来事でした。ドン・ボスコは牧者の心から、ほかの二つの会の創立を考えるようになりました：キリスト者の扶け聖マリア信心会と、協力者会です。ちょうどその頃、町外れの田舎のようなところだったヴァルドッコは、都会の一角のように変貌を遂げつつありました。ドン・ボスコは、その住民に礼拝の場を提供する必要があると考えました。

いずれにしても、教会を建てるということは資金を集め建築を完成させるという技術的なことにとどまりません。ドン・ボスコの魂を最もよく知る専門家にとってさえ、我らが創立者の内的生活においてこの大聖堂が何を意味していたかを説明することは難しいと知りつつ、それは霊的な、また司牧的な観点からドン・ボスコが思い巡らしていた進むべき道を表すものだったと、確かに言えるでしょう。

ピエトロ・ブロカルド神父は書いています：「しかしながら、このすべてをもってしても、ヴァルドッコの扶助者聖マリアの教会の建設の超自然に満ちた体験がなければ、そしてこの教会が『サレジオ会の』心、『中心』、サレジオ家族の『母なる教会』となっていなければ、ドン・ボスコはキリスト者の扶けマリアの大いなる使徒とはならなかったであろう。」<sup>20</sup>

大聖堂の建設と当時起きたあらゆることによって、反対とさまざまな問題への、期待もしなかった“驚異的な”解決によって、ドン・ボスコは感嘆にとどまらず、<sup>おそ</sup>畏れに近いものを体験しました。何よりもドン・ボスコを、そして後に世を驚かせたのは、あらゆる人間的予測に反する形で、おとめマリアご自身が、実際にご自分の家を建てられたということでした。

「これは、マルゴッティ博士があえて否定できなかった奇跡です：『人はドン・ボスコが奇跡を行うと言うが、私は信じない。しかし、ここに私が否定しえない一つの奇跡がある。それは、建設に約百万かかったこの壮麗な教会である[……]この教会は3年で出来上がった、しかもただ信者の善意の寄付に頼って。』」<sup>21</sup>

これらの出来事について読むのは感動的です。良識あるピエモンテ人であったドン・ボスコは、何人かの有力者の財政的支援の約束を取り付けていました。しかしよくあることですが、その約束は守られませんでした。ドン・ボスコはこの場合もまた、どこにも頼れないまま取り残されました。しかし、先の証言にあるように、「ただ信者の善意の寄付」によって、

<sup>19</sup> J. E. VECCHI, *Spiritualità Salesiana*, Elle Di Ci, Leumann (TO) 2001, p. 229.

<sup>20</sup> P. BROCARDO, *同上*, p.131.

<sup>21</sup> P. BROCARDO, *同上*, p.132.

想像もできなかったことが可能になりました：「その後、(“Auxilium Christianorum”の称号が選ばれた) 決定的な要因となったのは、来る日も来る日もドン・ボスコが体験したことであるように思われます。実際にマリアが『ご自分の家』をオラトリオの土地に自ら建設されたこと、そして、その場所からご自身の加護を広げるため、この家を自らの所有とされた、ということです。」<sup>22</sup>

私たちが行ってきた考察は、ヴィガノ神父の次の言葉にとっても美しくまとめられています：「この大聖堂の建立以降、キリスト者の扶けが、ドン・ボスコの精神と使徒職を恒久的に特徴づけるマリアの称号となります：ドン・ボスコは、自身の使徒的召命全体と数々の重要な業績を、キリスト者の扶けマリアのみわざと見なすようになります。特に聖フランシスコ・サレジオ修道会、扶助者聖母修道女会、そして大きく広がるサレジオ家族を、キリスト者の扶けが創立を望まれ世話されたと、ドン・ボスコはとらえるようになります。」<sup>23</sup>

## 2.2. 感謝すべき記念

サレジオの歴史家ピエトロ・ブライドは、ドン・ボスコによる ADMA の創立について次のように見事に叙述しています：「ものごとを造り上げる<sup>てんぶ</sup>天賦の才をもって生まれたドン・ボスコは、キリスト者の扶けマリアへの信心を、単にそれぞれの自発性に任されたものとして放っておくことはなかった。このマリアの称号からその名を取った会によって、その信心に安定を与えたのである。これをじかに見聞きした証人は、ドン・ボスコが心のうちに最も大切にしたい取り組み、二つの修道会と協力者会に次いで最も広く影響力を与えた取り組みを、ADMA の創立に見ている。『トリノのキリスト者の扶けにささげられた教会にて、教会法に則って創立されたキリスト者の扶け聖マリア信心会 – 聖母のこの称号についての歴史的解説付き ジョヴァンニ・ボスコ著』という冊子で、ドン・ボスコ自身、ADMA の起源について説明している。『読者の皆様』という序文に続き、短いいくつかの章で、聖書に始まり、レパントの海戦 (1571 年)、1683 年のウィーン解放、そして最後に 1814 年のピオ七世による祝日の制定に至るまで、『キリスト者の扶け』という称号について語っている。『ミュンヘンとトリノにおけるキリスト者の扶け聖マリアへの信心』について、またトリノの大聖堂にピオ九世が与えた霊的特典について数ページが割かれている。同会の教会法上の承認に関する文書がそれに続く。最初の文書は 1869 年 4 月付：トリノ大司教へのドン・ボスコの請願書、『会の教会法上の承認について』である。この中でドン・ボスコは、その『信心の計画』を『ご親切にお取り計らいくださるよう』、そしてその会則をご検討くださるようにと、大司教に願っている。そしていつものように限界を設けずに必要に応える姿勢を表しながら、『尊い天の女王の栄光と霊魂の善益を促進するために最も適切と判断される』、『加筆、削除、書き換え』を『どの条項においても』行っていただきたいと願っている。4 月 18 日付のリッカルディ大司教の承認は親切、寛大なもので、まもなく創立される同会に 10 年間有効な幅広い免償を与えた 3 月 16 日付のピオ九世の勅書に一致するものであった。冊子の巻末には、会則と、数々の祈り、信心業、それらに伴う免償、『免償について』の一般的な要理解説、『信心をもって』『キリスト者の扶け聖マリアの称号のもと無原罪の聖マリアにささげられたトリノの教会をその称号の祝い日、あるいはそれに先立つ日々に』訪れる人々に、ピオ九世が全免償を与えた 1868 年 5 月 22 日の勅令が収録されていた。

重要な文書について紹介する際、いつも習慣にしていたように、ドン・ボスコは ADMA の起源を『さまざまな所から、あらゆる年齢のさまざまな状況にある人々から』届く、『繰り返される要請』にあるとしている。その要請は、教会の建設と献堂の間中、そしてその後も届いた。会の趣旨は、会員が『同じ祈りと信心の精神のうちに一つになり、キリスト者の

22 E. VIGANÒ, 前掲書, p. 16.

23 同上.

助けという美しい称号で呼びかけられる、救い主の偉大な母に崇敬をささげる』ことであった。

この場合も、ドン・ボスコは短時間で会則を書き上げた。それは教義的、あるいは法的な観点から傑作と言えるわけではなかったが、直截的、実際的であることにおいて卓越していた。ドン・ボスコがふだんから密接に結びつけていた、最も聖なるマリアへの信心と聖体のうちにおられるイエスへの信心の結びつきが、ここにも見られる。主題は見出しを設けずに三つの部分に分けられている：目的と手段、霊的な利益、入会。[...] ドン・ボスコは会をより大きく広げるため、ADMA を既存の、あるいは以後創立される同様の会を統合する権限を持つ、大信心会 Archconfraternity として創立する許可を得た。」<sup>24</sup>

### 2.3. 継続的に取り組むべき刷新

ドン・ボスコがキリスト者の助け聖マリア大信心会と名付けた会（今日の ADMA）は、その最初から世界的な広がりを持ち、大いなる活力と広まりの時期と、危機に直面し忘れられる時期とを行ったり来たりしました。1988 年、ドン・ボスコ帰天 100 周年の年、総長エジディオ・ヴィガノ神父によって、歴史的な再発進が実現しました。サレジオ会の第 24 回総会は次のように宣言し、重要な認証を与えました：「ドン・ボスコは、扶助者聖母への信心家たちのアソシエーションをも発足させ、この人々を、大半の普通の人たちにも可能な活動および努力事項において、サレジオ会の精神ならびに使命に参加させた。」<sup>25</sup>

サレジオ会とサレジオ家族は、キリスト者の助け聖マリアへの信心と共に成熟の過程を歩んできたと言うこともできるでしょう。実際、サレジオ霊性はキリスト者の助け聖マリアへの信心と切り離すことができません。それは、ありえないことですが、ドン・ボスコとキリスト者の助け聖マリアとを切り離そうとするようなことです。キリスト者の助けへの信心は、私たちが聖霊の賜物としてドン・ボスコから受けたサレジオのカリスマに本来的に備わる、サレジオの「使命」と「精神」の両方に、密接に結ばれているのです。

ADMA はこの歴史の歩みを忠実にたどり、2003 年 10 月 7 日、奉献生活・使徒的生活会省により会則の承認を受けました。

2007 年以来、ADMA は著しく刷新され、会員数においても質においても成長してきました。家庭が参加するようになったこと、またチェストホーヴァ（2011）やトリノ（2015）で開催された扶助者聖マリア国際大会といった、さまざまな取り組みのおかげです。

刷新の歩み、帰属意識の深まり、世界に 800 以上ある ADMA のグループの共通の養成を大いに助けているのは、年間養成プログラム、毎月のキリスト者の助け聖マリアの記念、静修や黙想会、毎月の 7 か国語での ADMA online の発行、ウェブサイトの充実<sup>26</sup>、*Quaderni di Maria Ausiliatrice* の発行です。

### 2.4. 交わりのダイナミズムにしたがって

この 3 年、ADMA の刷新の歩みは、家庭のために 2 回、そして若者のために 1 回、司教シノドスを開催した普遍教会との深い一致のうちに進められてきました。

<sup>24</sup> P. BRAIDO, *Don Bosco prete dei giovani nel secolo delle libertà*, LAS, Roma 2003, vol. I, pp. 526-528.

<sup>25</sup> 第 24 回総会文書 GC24, 80.

<sup>26</sup> [www.admadonbosco.org](http://www.admadonbosco.org).

家庭のためのシノドスの終わりに、教皇は次のように述べました：「この体験は、シノドスに参加した人々に、信仰を告げ知らせ、伝えていくために教会のシノドス的なあり方が重要であることを認識させてくれました。若者の参加は、教会を形づくる次元の一つであるシノドス性が“再び目覚める”ことに貢献しました。[...] 聖ヨハネ・クリズストモが言うように、『教会とシノドスは同義である』、なぜなら教会は、主キリストと出会う歴史の道を、神の民の群れが『共に歩むこと』にほかならないからです。」<sup>27</sup>

このシノドス的な側面は、若者のための司教シノドスの最終文書で、今日の教会におけるふさわしいあり方、行動の仕方として、力強く再確認されました：

「シノドス性は、あらゆる文化と地平の老若男女から成る神の民、キリストの体である教会の生き方と使命、その両方の特徴です。その教会において、疎外に追いやられている人、踏みにじられている人を始め、私たちは互いに部分として結ばれています。……信仰が受け渡されていくのは、関わりにおいてです。キリストとの関わり、他者との関わり、共同体における関わりです。福音宣教のためにも、教会は関わりを築く姿勢を身につけるよう招かれています。それは、耳を傾けること、温かく迎えること、対話、共に識別を行うこと重視するもので、関わる人々の人生を変容させる歩みとなります。……このようにして教会は、契約の櫃が保たれている『出合いの幕屋』として姿を現します（出エジプト 25 章参照）：ダイナミックな教会、動きのある教会、旅しながら共に歩む教会、数多くのカリスマと奉仕職に強められている教会です。神はこのようにしてこの世に存在されるのです。」<sup>28</sup>

この分かち合われる旅の表現は、ADMA においてますます生き生きとした体験になっています。奉献生活者、司祭、信徒といったさまざまな身分の人々の信仰の交わり、カリスマにおける帰属意識の体験です。賜物と祈りの交流、一人ひとりが自らのアイデンティティーを見だし強めるのを助ける、実り豊かな交換があります。このことは、より教会的な、同じサレジオの精神における交わりのダイナミズムを回復させることによって、時に相手を利用することさえある関わり方とまではいかなくとも、機能的な役割の観点から理解されることのある人との関わり方を乗り越える助けになります。

さまざまな生き方の道の美しさと相互の補完性を強調することは、召命の観点からも進んで受け入れられ、評価されるべきアプローチです：信仰の歩みとサレジオの使徒的取り組みを共にする、司祭、奉献された男女、信徒というさまざまな生き方の道です。奉献生活者と信徒の間に生活の交わりが築かれ、その交わりは、それぞれの固有のアイデンティティーが豊かにされるのを助け、仕事上の機能的なレベルにとどまらず、それぞれの固有性にしながら、兄弟愛の霊的なレベルで、互いに認め合うこと、互いを評価し、支え合うことを促進します。

このように示すことによって、信徒の存在は正しく受けとめられ、信徒が正しい形で参加できるようになります。ADMA は信徒が責任を引き受け、ミッションに参加するよう勧めます。自分たちの場 *ad intra* だけでなく、外に向けて *ad extra* も、すなわち、私たちの事業においてだけでなく、教会や社会の営みにおける他のさまざまな分野においてもそうするよう勧めます。

ADMA の理解と発展は、会固有の霊性と使命に向けて育成される信徒の養成にかかっています。それは交わりの教会論と、信徒の、新たな預言職・王職・祭司職への意識の再発見と調和するものです。さらに、ADMA の信徒性に注目することは、教会をヒエラルキーや

---

<sup>27</sup> フランシスコ、世界司教会議シノドス制定 50 周年記念のあいさつ、2015 年 10 月 17 日。

<sup>28</sup> 教皇フランシスコに上申されたシノドス最終文書(2018 年 10 月 27 日), nn. 121-122.

司祭たちとのみ同一視する傾向を乗り越えさせ、神の民の共同の責任と使命を力づけます。同時に ADMA の信徒的側面は、神の民について社会的、政治的な視点からのみ考えるあらゆる傾向をあらためさせ、神の民のキリストの体としての類ない固有の特質を促進させます。「神の民を眺めるとき、私たちが皆、信徒として教会の一員になるということが思い起こされます。永遠に私たちのアイデンティティーに刻まれ、私たちがいつも誇るべき最初の秘跡は、洗礼です。この秘跡を通して、また聖霊の油注ぎによって、（信徒は）『靈的な家および聖なる祭司職となるよう聖別される』（第二バチカン公会議文書、教会憲章 10）。教会が少数精鋭の司祭、奉獻生活者、司教たちから成るのではなく、皆が信仰を生きる聖なる神の民を形づくるのだということを覚えておくの良いでしょう。このことを忘れるとき、教会が私たちにゆだねた、私たちの個人としてまた共同体としての奉仕職の体験において、さまざまな危険やゆがみへ向かうこととなります。」<sup>29</sup>

確かに、教会の三つの身分の人々が互いに協働するには、司牧における考え方の変革が求められます。それはあらゆる召命に影響を与えますが、信徒に関しては、信徒を単に「協働者」としてだけでなく、教会とその活動において「共に責任を担う人々」として認識し評価するよう、そのようにして信徒が成長し責任をもって取り組むことを促進するよう、私たちに求めます。そのため ADMA では、会の適格な優れた運営において、まさに信徒が主要な責任を担っています。

## 2.5. 聖性の道で

ADMA は「聖性とサレジオの使徒職へ導く道」<sup>30</sup>であり、普遍的な聖性への招きの中で、指し示され、生きられるものです。普遍的聖性は、聖フランシスコ・サレジオにとっても、サレジオ家族の父ドン・ボスコにとっても、とても大切でした。聖フランシスコ・サレジオはすべての人に信心生活を勧め、ドン・ボスコはオラトリオの子どもたちと市井の人々の前に、誰にでも開かれ、たどりやすく、永遠の幸せに至るものとして聖性の道を示しました。聖フランシスコ・サレジオとドン・ボスコは、恵まれた少数の人に限られたものではなく、どこに暮らしていようと、どのような身分であろうと、どのような仕事に就いていようと、常にすべての人が呼ばれている道として聖性を示したのです。第二バチカン公会議はこのことを確認し、宣言しました。教皇フランシスコは使徒的勸告『喜びに喜べ *Gaudete et exultate* - 現代世界における聖性』で、このことを力強く再確認しました。今年、2019 年のサレジオのストレンナも、「聖なる者になろう」と、すべての人への明確な確固とした聖性の呼びかけになっています。

もちろん、この道は時に、潮流に逆らって歩むことが求められますが、しかし、最終的には、まさに至福、すなわち幸せの道です。聖フランシスコ・サレジオの模範に倣い、聖人のヒューマニズムと楽観的なものの見方からインスピレーションを汲みながら、私たち皆が経験しなければならない困難にもかかわらず、人間的な視点から見ても、キリスト者として生きることがすでにこの世で幸せをもたらすということを目に見えるようにすることはとても大切です。

何よりもそれは、家庭で生きられる聖性の道です。特に、堅忍のうちに愛することによって良い模範を示しながら：夫婦の間で、親子、兄弟姉妹、若い世代と年配の世代の間で。私たちは相手にとって良いことを望み、求めなければなりません。具体的に「良いこと」とは、相手をありのまま受け入れることが求められます；話をする時間を取ること、愛情と尊敬に基づいた関係を築くこと、理解しゆるすことができること、不満・批判を避けること。ナザ

<sup>29</sup> フランシスコ、教皇庁ラテン・アメリカ委員会 委員長への手紙 (26.04.2016 年 4 月 26 日)。

<sup>30</sup> ADMA 会則, 第 2 条。

レの聖家族のように、困難を前にしたときにあきらめず、両親も子どもたちも神とみ摂理への信仰を生きる家庭は、教会と社会にとって大きな支えであり、善の実り豊かな源泉です。

世界中に広がる我々がサレジオ家族のあかしもそうです。各グループのさまざまなカリスマをもってドン・ボスコの大いなるビジョンを実践するよう努めながら、奉獻された者として、すべての人に私たちが差し出すあかしです：すべての人のために、すべての子どものキリスト者としての生き方のために、聖性の道をわかりやすいもの、近づきやすいものにするからです。

したがって、若い世代にも、勉強、友情、仕事、奉仕などの中で生きる、ふだんの生活における聖性という理想－イエスに従うこと－を示さなければなりません。世界は、そして世界と共に教会も、すでにあなたたちの手の中にあると理解させながら。そのため、若者は、人として、キリスト者としてのよい養成を受け、同時に、希望と信頼をもって受け入れられていると感じることができるよう、助けられなければなりません。基本は、生活の日常的な状況の中でキリストを知り、愛するよう、そしてキリスト者の扶け聖マリアにゆだねて生きるよう若者を助けることです。

ヴァルドッコの聖フランシスコ・サレジオ教会に足を踏み入れるたびに、私は大きな感動を覚えます。なぜなら私にとって、そこは私たちの最も意味深い場所の一つであるからです：この小さな教会は、少年たちの成長の道における実に多くの聖なる時、祈りを目撃してきました。ドメニコ・サヴィオが聖体に一致するあまり時空の感覚を失ったのは、この教会でのことでした。ドメニコと仲間たちはここで、共に聖性の道を歩む心意気をもって、無原罪の聖マリアに自分たちをささげました。マンマ・マルゲリータはここで祈りました。ミケーレ・ルアやジョヴァンニ・カリエロ、そのほか初代のサレジオ会員たちが、ここで初ミサをささげました。実に多くの少年たちの信仰における生活が、日々ここで、聖性において成長する道となっていきました。内装は塗り替えられていますが、同じ造りのこの小さな教会で、目を閉じてその少年たちとドン・ボスコの姿を想像するのは私にとって素晴らしいことです。心を深く揺さぶられます。

先に触れた今年のストレンナは、聖なる者になるという贈りもの、恵み、挑戦、務め、機会を若者に指し示すことができると、私たちに語ります。サレジオ家族には、46人の29歳以下の聖人、福者、尊者、神の僕がいます。

この聖性への呼びかけが非常に魅惑的なのは、聖性を生きることが、特別な普通と違うことをするというのではなく、勉強や仕事、人との関わり、奉仕、夏のキャンプ、歌など、すべてを続けながら、聖霊が心に、私たちの存在と希求の最も深いところに働きかけるのを、真剣に受け入れることだという点です。

今日の世界が必要としているのは“風変わりな”若者ではなく、確信をもった若者たちです。神を選んだ若者、福音の喜びを謙遜に勇気をもってあかしする若者です。今日もなお、サレジオのカリスマを生きる多くの若者が世界にいます。この若者たちは、まことの生き方と聖性の学び舎が生まれ発展したヴァルドッコのオラトリオの最初の若者たちからインスピレーションを汲みながら、自分たちの生き方をもって美しいページを記したいと望んでいます。

すでに述べたように、完了間近の「ドン・ボスコ」の家（ピナルディ棟）の修復のことを考えながら、そこで、ドン・ボスコの傍らで、日々、日常の聖性の学び舎が芽生えていたことを思います。実際、今年のストレンナを歩む中、世界中のさまざまな集いで、何百人もの子ども、若者たちが私に話してくれました。信仰のグループ、サレジオの家で、自分で、あ

るいは友人たちと一緒に、聖なるキリスト者としての本物の生き方を歩む真の旅に取り組み、真剣に考えたこと。日々の生活の中で生き抜かれる聖性へと、教皇フランシスコの言葉を借りると「すぐ隣にある聖性」へと導く旅路です。これは何も風変わりなことではないと、私は言いたいと思います。それはただ、かつての若者と同じように、今日の若者が、人生で目指すことのできる大きな理想が存在すると感じる必要があるということなのです。

今日の ADMA も、この霊的緊張をもって歩んでいます。同じように、それぞれに多くのメンバーを擁する ADMA の若者グループがあり、そのメンバーの中には、教会が生き方の模範として掲げる女性たちがいます。私たちは信仰の旅の支えとして、その取りなしを求め祈っています。

そのうちの一人は福者アレキサンドリーナ・マリア・ダコスタです。1944年9月12日、霊的指導者であったウンベルト＝マリア・パスクアーレ神父はアレキサンドリーナを ADMA に迎え入れました。そして福者テレサ・セフード＝レドンドもいます。テレサは妻、母であり、1936年に殉教しました。ポソブランコ（スペイン）の ADMA の創設に貢献し、その事務局長に選ばれています。さらに、1928年にニツァ・モンフェッラートの ADMA に入会したロゼッタ・フランツィ＝ゲッド、2007年に帰天した、ラ・パルマ・デル・コンダード（スペイン）のカルメン・ネボ＝ソルダンら神の僕がいます。この福者、神の僕たちは、聖体と聖なるおとめ（サレジオ霊性の大きな二つの柱）への特別な愛、また、殉教や家庭生活の苦しみにおける英雄的な信仰のあかしが際立っています。また、サレジオのカリスマに参与し、この世で信徒として、家庭、社会においてドン・ボスコの精神を類ない形で示していることでも一致しています。ADMA のすべてのメンバーおよびサレジオ家族のメンバーのために、聖性の模範、刺激となっています。

### 3. サレジオのカリスマの庶民的な特質

一般にサレジオのカリスマと働きは、通常、若者の世界と結びつけてとらえられています。この基本的な側面と共に、カリスマの庶民的な側面を忘れないようにすることはとても大切です。それはドン・ボスコが ADMA の創立を通して表現したことです。ドン・ボスコは、ふつうのキリスト者、庶民の信仰の擁護と発展のために ADMA を広めました。したがってドン・ボスコの使徒的精神に従うイエス・キリストへの信仰とマリアへのゆだねは、ADMA のアイデンティティーと使命を構成する要素なのです。

庶民の世界は、若者という選択を表現する自然な、日常的な場であり、若者たちを探し求め、彼らと出会う社会的、人間的な環境です。実際、若者と庶民層の間には自然な親和性があります。新しい世代の人的成長と信仰の成長のために共に歩むドン・ボスコの家族の取り組みは、若者とふつうの人々・庶民層のうちに見いだされる福音的価値に光をあてようとするものです。多様な生き方の道と年齢の人々を擁する神の民全体の中でこそ、世代間の絆、家庭の役割が価値あるものとして大切にされ、しばしば分裂して崩れ、対立の生じている社会に対し、わかりやすく実践しやすい応答を差し出すことになるのです。

サレジオの使命の庶民的な側面は、特別な意味で私たちの特徴であり、創立のカリスマの典型的な表現です：「天の照らしを受け、ドン・ボスコは大人にも目を向けました。優先的に、素朴な貧しい人々、労働者、都会の一般市民、移民、疎外された人々に注意を向けました。ひと言で言えば、物的、霊的な助けを最も必要とするすべての人です。ドン・ボスコの指針に忠実に、サレジオ家族の各会はこの優先的選択を共有しています。扶助者聖マリアの

会は新しい会則（2004）に、特に社会のふつうの人々に仕えるサレジオの使徒職に関わる条項を加えました。」<sup>31</sup>

「日常生活の中で」、この大きな、多様な人々から成る共同体に献身することのうちに、私たちは真の神の体験を味わいます：「社会のふつうの人々、労働する人々の世界は、私たちが青少年に出会う自然な、日常的な環境です。特に最も助けを必要とする青少年です。ドン・ボスコの家族の献身は、社会のふつうの人々に向けられ、人間的な向上と信仰における成長への人々の努力を支え、自分たちの掲げる人間的・福音的価値を指し示し、促進します。いのち・生きることの意味、よりよい将来の希望、連帯の実践といった価値です。ドン・ボスコはまた、サレジアニ・コオペラトーリ、扶助者聖マリアの会と共に、大衆的な信心をよく活かしながら、人々の信仰教育の道を開きました。」<sup>32</sup>

### 3.1. 大衆の宗教心（“大衆信心”あるいは“大衆の霊性”）

ドン・ボスコは、家庭で受けた養成と育った宗教的環境のおかげで、また若者の司牧の取り組み方のため、大衆的な宗教心の価値を認め、それを人生の賢明な見方の表現、生活と信仰の意味ある統合の仕方ととらえ、キリスト教的信心と霊性の実り豊かな形を提供しました。この数十年、教会における教皇の教導、神学的考察は、深い、豊かな道をたどってきました。それはドン・ボスコの抱いていた確信に光をあて、確認するものでした。それは今日、私たちが ADMA を通しても、世界中で広め、育んでいるものです。

この観点から、聖パウロ六世は使徒的勧告『福音宣教 *Evangelii nuntiandi*』に次のように書いています：

「民間信仰心は、（…）もしそれらがふさわしく、とりわけ福音化の道と論拠をとおして方向づけられるならば、多くの価値に富んだものとなります。というのは、それは質朴で貧しい人々のみが知りうる、ある神への渴きを示していて、信仰告白が問われるときは、人々に自らをささげて、熱心に徳の頂点に至らせる力を与えます。また、それによって神の言い難い属性 - 神の父性、摂理、好意ある恒常的な愛の現存 - が知覚されうる鋭い感覚をもたらします。また、ほかではそれに匹敵しそれに等しいものが見当たらないのですが、内的な人間の態度、すなわち忍耐、さらに毎日の生活において担われる十字架の自覚、物からの解脱、他人を寛大にゆるすこと、崇敬を生み出しています。（…）よく指導されるならば、このような民衆的宗教性は、わたしたちの一般的大衆が、キリスト・イエスにおける神と本当に出会うことにますます寄与することができるのです。」<sup>33</sup>

教皇フランシスコは、前任者パウロ六世がこの勧告で、「大衆の宗教心」ではなく、むしろ「大衆信心」という言葉を使うことを提案し、その後、ラテン・アメリカの司教たちがさらに歩を進め、アパレシーダ文書で「大衆の霊性」について語ったことを思い起こさせます。「三つの概念はそれぞれ有効ですが、一致しています。」<sup>34</sup>

教皇は、この宗教心のさまざまな表現が真実なものとなるよう清めることに常に注意しなければならないことを認識しつつ、信心を、その重要性を低めることなく、広め評価されるべき福音宣教の本物の形としてとらえています：「巡礼に出かける人が個としてではない“群衆的な”霊性を生きていると考えるのは間違いです。実際には、巡礼者はそれぞれの歴史、信仰、人生の光と闇の側面をたずさえて来るのです。一人ひとり、心のうちに特別な望

<sup>31</sup> ドン・ボスコのサレジオ家族 アイデンティティー憲章, n. 16.

<sup>32</sup> 同上 n. 31.

<sup>33</sup> パウロ六世, 使徒的勧告『福音宣教』 *Evangelii Nuntiandi* n. 48

<sup>34</sup> フランシスコ, 巡礼活動従事者および巡礼地責任者へのあいさつ, 2016年1月21日.

み、何らかの祈りをいただいています。巡礼地の聖所に入る人々は、わが家に来たように思い、温かく迎えられ、理解され、支えられていると感じます。」<sup>35</sup>

私たちは、父ドン・ボスコが広めたサレジオ家族におけるキリスト者の扶け聖マリアへの信心を、この教会的な文脈のうちに位置づけるのです。

### 3.2. キリスト者の扶け聖マリアへの信心

ドン・ボスコはキリスト者の扶け聖マリアへの信心を、まさに神の民の信仰の助けと擁護という観点から理解し、促進しました。生きることからキリスト教的な意味を奪うイデオロギーの誘惑、また信仰と、ペトロの信仰告白の堅固な岩の上に築かれた教会の一致を破壊しようとするさまざまな運動の攻撃に、神の民はさらされていました。ドン・ボスコにとってキリスト者の扶けへの信心は、それまで知られていなかった特定の独特な称号を強調することではなく、むしろ、マリアの普遍的な母としての役割を示すことでした。マリアは、ご自身の「家族」の創立事業に関わられ、そのようにして、いわば共同作業を進められたのです。これはドン・ボスコの深く揺るぎない確信です：「マリアがすべてを成し遂げられました」。私たちはマリアに信頼を置くことができます。したがって、自分たちをマリアに明け渡しゆだねることができます。こういったことすべては、典礼、教義、霊性、民衆の信心におけるさまざまな公的、私的な表現、教会が承認し、認可するさまざまな表現に価値を見いだす、教会の精神のうちにあるのです。*Da mihi animas cetera tolle*の使徒的情熱は、霊性とキリスト教的・サレジオ的教育の二つの大いなる柱：聖体と聖母にしっかりと結ばれているときはじめて、時が来れば実現できると、ドン・ボスコは確信していました。聖体のイエスへの、またキリスト者の扶け聖マリアへの生き生きと新たにされた信心から、新たな兄弟的絆を築き上げることができます。その絆は、良い識別の歩みを発展、促進させ、福音に調和する教育・司牧活動を生み出すことができます。

キリスト者の扶け聖マリアを人々に知らせ、愛され、仕えられるようにすることは、キリスト者の扶けの使徒、ドン・ボスコのこの預言的な言葉に励まされ、取り上げたいと私たちが願う務めです：「この信心、言い換えれば、この愛、信頼、歓喜、キリスト者の扶けを頼みとすることは、日々、信じる人々の間でますます大きくなっており、いつの日か、すべての善良なキリスト者が、聖体とイエスのみ心への信心と共に、キリスト者の扶け聖マリアへのやさしい愛情こもる信心を告白するのを誇りに思う時が来ると、十分な根拠をもって言うことができるでしょう。」<sup>36</sup>

実際、「サレジオ家族の中で、本会はマリア信心の特別な価値を、福音宣教の手段、庶民層と助けを必要とする子ども・若者の向上の手段として、強調し、広めます。」<sup>37</sup>

したがって、ADMA がサレジオ家族の一員であることは、たまたまそうであるのではなく、聖ヨハネ・ボスコが生き、広めた特定のマリア信心に根ざしているということを明確にすることが大切です。ADMA のマリア的な性格は、サレジオのカリスマと精神を構成する要素の表現なのです。このように動機づけられ、サレジオ家族の一員であることから、サレジオのカリスマの若者と庶民層のための使命にあずかる道に呼ばれ、神の民の信仰を世話し、増させ、擁護する取り組みはいっそう責任あるものとなります。「信仰が試練を受け、神の

<sup>35</sup> 同上。

<sup>36</sup> *La nuvoletta del Carmelo, ossia la divozione a Maria Ausiliatrice premiata di nuove grazie*, per cura del sacerdote GIOVANNI BOSCO, S. Pier d'Arena, Tipografia e libreria di S. Vincenzo De' Paoli, Torino – Nizza Marittima, Libreria Salesiana Patronato di S. Pietro 1877.

<sup>37</sup> ADMA 会則, 第3条。

民の多くの者が、主イエスへの忠実ゆえに苦難にさらされている今日<sup>38</sup>、人類のうちに(…)霊的・精神的価値の深刻な危機が表れているこのとき、教会はマリアの母としての介入の必要を感じます：唯一の主、救い主に従う歩みを力づけるため、キリスト教信仰の源泉の生命力と勇気をもって世界の福音宣教を前進させるため、共同体の信仰、一人ひとりの信仰を照らし導くため、そして特に、ドン・ボスコが父、師として自分自身のすべてをささげた若者に、生きることのキリスト教的な意味を教育するためです。」<sup>39</sup>

### 3.3. 第8回扶助者聖マリア国際大会

この観点から、アルゼンチンのブエノスアイレスで2019年11月7日から10日にかけて開催される第8回扶助者聖マリア国際大会を、喜びをもって思い起こします。テーマは、「信じる方、マリアと共に」です。

み言葉に耳を傾けることを中心に据えるこのイベントは、神の驚くべきみわざについて語りながら、イエスへの信仰がいかに人から人へ、一つの世代から次の世代へと受け渡されていくかに光を当てるものとなります。これらのすべてを、マリアが共におられながら行います。マリアはイエスを迎え、おとめの胎に宿されました。そのためマリアは母、信仰の先生、導き手なのです。特に、聖性の旅をたどる若い世代に同伴する道において。

第8回扶助者聖マリア国際大会は、総長による提案に従い、サレジオ家族事務局とアルゼンチンのサレジオ家族との対話のうちに、扶助者聖マリアの会(ADMA)が推進するサレジオ家族の行事となっています。

この国が選ばれたのは、ドン・ボスコにとって最初の宣教の前線であったこと、また同時に、教皇フランシスコにとってキリスト者の扶け聖マリアへの信心が特別な重要性をもつことを思い起こすためです。ブエノスアイレスのアルマグロ地区にある扶助者聖マリア大聖堂は、ホルヘ=マリア・ベルゴリオが洗礼を受け、キリスト者の扶け聖マリアへの愛をいつも表した場所なのです。ペトロの座にあげられ、故郷を後にしなければならなくなる時まで。

## 4. マリアの家から私たちの家へ

サレジオのカリスマは、家庭を活気づけることのうちにその源泉に立ち帰り、家庭は、ドン・ボスコの精神との出会いによって福音的な活気と喜びを得ます。私たちは、教育の最初の主体、福音化の第一の場である家庭の現状に、特別に目を向けています。全教会は家庭が直面する数々の深刻な困難について、そして家庭の養成、成長、教育的役割の責任ある遂行のために、特別な支援をさしのべる必要があることを認識するようになってきました。こうして、家庭司牧と青少年司牧が互いに開かれ、共に歩む必要があることを、私たちは経験しています。

サレジオ家族において、「人間的成長の始まる場である家庭に、特別に目を向けなければなりません。それは、人を愛し、いのちを受け入れることへと若者を準備させる場であり、人々の中の、また異なる国民・民族の間の連帯を学ぶ最初の学校です。サレジオ家族の皆が、

---

<sup>38</sup> この箇所を書いているとき、短い間に二度、宣教師の死の知らせを受けました。三か月の間に、ブルキナファソ(AFO フランス語圏西アフリカ管区)で、宣教師会員セザル・アントニオ・フェルナンデス神父とフェルナンド・エルナンデス神父のいのちは残酷に断ち切られました。教皇の言葉が現実となりました：「今日世界中で、その信仰ゆえに、何千人ものキリスト者が、毎日いのちを落としています。」

<sup>39</sup> ヨハネ・パウロ二世, お告げの祈り(1988年1月31日), 最高評議会報 n. 325, p.41

家庭に尊厳が与えられ、健全な土台の上に立てられるために働きます。家庭がますます明らかかな形で『家庭の教会』となるためです。」<sup>40</sup>

この家庭への注目は、新たな世代の人的成長、福音化、教育を目指すものです：「『よいキリスト者、誠実な市民』を育成するという目標を、ドン・ボスコは人間として、キリスト者として満ち満ちた生き方をするために青少年が必要とするすべてを示すために、最もよく言い表していました。必要とするものとは、衣服、食べ物、住まい、勉強、余暇、喜び、友情、生きた信仰、神の恵み、聖性の道、参加、ダイナミズム、社会と教会の中の一人ひとりの場所などです。」<sup>41</sup>

扶助者聖マリアの会もまた、この観点から刷新されており、家庭、若い夫婦の姿がますます見られるようになっていきます。家庭、若い夫婦はマリアの導きのもと、養成、分かち合い、祈りを通して人生の歩みを共にしています。マリアは、夫や妻となるため、親となるために必要な教育の母、先生です。この刷新は、メキシコで開催された第5回扶助者聖マリア国際大会（2007年）の終わりに出された総長パスクアーレ・チャーベス神父による特別な委託の実りであり、この委託を、私は2015年のトリノ大会で再確認しました。

ADMA は夫婦の召命の支えとなり、子どもたちの教育のために大きな助けになります。ADMA のプロジェクトは、家庭を全体としてとらえながら家族に目を向けるものです。両親の歩みと子どもたちの歩みを、刺繍のように織りなさせます。実際、両親が祈り、信仰を分かち合うのを見ながら、子どもたちは家庭の中でイエスとマリアと共に生きることを学ぶのです。両親は子どもたちを見守りながら、信仰のあかしこそ差し出すことのできる最良の贈りもの、残すことのできる最も豊かな遺産であることを、ますます確信するようになります。

このことから、人が日常生活の中で生き方を形づくる徳を身につけながら、人間として、キリスト者として成長する特別な恵みの場となるよう、家庭を助ける取り組みが求められるようになります。私たちは家庭と共に歩み、直面する複雑な状況において家庭に同伴しなければなりません。新たな道や共通の方策を見だし、結婚の召命において夫婦を支えながら。

家庭は、教育の第一の源泉、キリスト者としての成長の肥沃な土地です。今日、キリスト者としての道を若者に示すために、若者の家庭と協力し、家庭と共に歩むことが不可欠です。このような協同がありうるのは、愛情にまつわることと家庭の体験のあらゆる領域にわたります：十代の若者や青年への愛の教育、婚約者たちのための結婚と家庭生活に向けた準備、奉獻生活や司祭職への特別な招きを感じている子どもたちの同伴、婚姻を執り行い、祝うこと、若い夫婦、親に同伴すること、困難や変則的状況にある家庭に特に心を配ること、サレジオ霊性の観点からの結婚の霊性、家庭の霊性への配慮、などです。

#### 4.1. 家庭にやさしい旅路

これはドン・ボスコの足跡をたどる ADMA のうちに生まれた体験です。日々の生活の中に祈り、対話の時間、ゆるし、愛する時を見だしながら、夫あるいは妻、親、兄弟、姉妹となるよう呼ばれた招きを、満ち満ちて生きるようにという提案です。そのようにして、この歩みは、サレジオのカリスマが持つ慈愛の家族的スタイルに一致します。イエス、ヨセフとマリアのまなざしのもとで、どのような時も、最も単調な時も、相互愛のうちに希望を失わずに生きるオラトリオのスタイルです。最も美しいあかしとなるのは、聖体とキリスト者

<sup>40</sup> ドン・ボスコのサレジオ家族 アイデンティティー憲章, n. 16.

<sup>41</sup> 同上, n. 17.

の助け聖マリアがまさに生活を支える柱、日々の困難の中で抛りどころとなるのを見ることです。ドン・ボスコの二つの柱の夢は、家庭の歩みの心、中心となります。日々新たにされる夫婦の愛、一人ひとりの成長、家族としての成長、教育という難しい役目における親の養成、信仰を分かち合い周りの人々にあかすできるように育む子どもたちの友情。家庭は、それぞれの可能性にしたがって参加します。また、小教区の活動やオラトリオに積極的に参加しながら、地方教会の営みにあずかるようにも招かれています。これらのことすべては、ドン・ボスコが当時考えたことを忠実に、今日の神学的、教会論的なビジョンをもって表現し発展させるすばらしい方法であると、私には思われます。

## 4.2. 家庭のための家庭

今日、家庭は単独で生きていくことはできません。快樂主義的な方向性を見失った文化、また人々の生活スタイルを特徴づける孤独から、キリスト教的な価値観が深められ培われるような環境を共に創り出す必要が生じています。このことは、家庭のための家庭となることに向けて歩むことを意味します。喜びを分かち合い、重荷や困難を共に担い、いくつかの点に配慮しながら。

### – 結婚を中心に置き、イエスを結婚の中心にお迎えする

夫、妻としての召命、親としての召命を歩むように努めます。イエスを日常生活にお迎えする必要があることを認識しながら。マリアの導きと聖ヨセフの加護のもと、不安や労苦、喜び、希望をイエスのみ手にゆだねます。神は「夫婦の日々の生活」を通してご自身をあらわすことを望まれます。夫婦の絆を強めること、子どもたちの教育、仕事や使徒職への献身のうちに。

### – 恵みの首位性を保つ

どの家庭も賜物や恵みを受けます。日々の祈りに忠実であるとき、神に愛されている子どもであるという認識が生まれ、結婚と家庭の愛は成長します。神は婚姻の秘跡のうちにくださった恵みを、祈りのうちに、日々、新たにしてくださり、生活を意味あるものとして満たしてください。

### – 祈りが愛となることを体験する

祈りと養成の歩みの中で受けた賜物は、日々の生活にもたらされます。それはさまざまな形で表されます：周りの家庭の必要や困難に心を開くこと；司牧にたずさわること、特に若者、あるいは最も貧しい人々のため；あるいはほかの家庭と共に信仰の養成、分かち合いにおいて。より長く旅路を歩んできた家庭の体験が提供されるよう、特に若い家庭に心を配ること。

### – 霊的な同伴

一人ひとりの同伴、夫婦の同伴がいかに重要か、私たちは学んできました。司祭、奉獻生活者と共に、夫婦も同伴者となります。結婚を生き、キリスト者、サレジアンとして生きる家庭生活のすばらしい旅路を歩んできた夫婦は、信仰の道の貴重な導き手となり、召命と使命の中心におられる神の体験を分かち合います。

## 4.3. 青年 ADMA

キリスト者の助け聖マリアの特別な恵みとして、ADMA の霊性と使徒的取り組みを自分たちも生きたいと願う若者のグループが生まれています。その家族と共に若者たちが“接ぎ木された”ことを、新しい世代を世話されるキリスト者の助け聖マリアの摂理的な贈りものとして私たちは受けとめています。これは、私たちの出会う摂理的な状況を評価すると共に、

引き続き考察し、論じなければならない重要な点です。青少年司牧と連携し、若者に意味深い体験や道のりを提供することが進むべき道であることは確かでしょう。

青年 ADMA は、ドン・ボスコのカリスマに従って歩む、子ども、若者のためのキリスト者の生き方の提案です：信仰の体験、御父の愛、御子のあがないのわざ、聖霊の力の体験を、キリスト者の助け聖マリアと共に生き、福音と教会に仕える者になることです。それは、この恵みの賜物を喜びと招きに応える心で受けとめ、具体的で一貫性のある生き方の選択を通して実り豊かなものとする歩みです。

私たちは、若者について、マリアへの信心について考えるとき、ドン・ボスコが少年たちに求めたこと、どのようにおとめマリアを愛するよう少年たちを導いたかを、忘れることができません。そのあかしは、多くの例の中でも、ドン・ボスコが書いたドメニコ・サヴィオ<sup>42</sup>とミケーレ・マゴーネ<sup>43</sup>の伝記に見いだすことができます。

ドメニコ・サヴィオについて、ドン・ボスコは書いています：「ドメニコの中で、神の母への信心は非常に大きいものでした。毎日、聖母をたたえるために何かの犠牲を行っていました。（…）彼は、マリアの汚れなき心への特別な信心をもっていました。教会へ行くたびに聖母の祭壇を訪れ、あらゆる汚れから自分の心を守ってくださる恵みが与えられるよう祈るのです。（…）彼は聖母マリアへの信心が篤いだけではありませんでした。マリアのための信心業をするようにだれかほかの人を導くことができたなら非常によろこんでいました。」

ミケーレ・マゴーネについて、ドン・ボスコはこのように書いています：「聖母マリアへの信心は、すべての忠実なキリスト者にとって支えとなるものであることを言うておかなくはなりません。これはとりわけ若者たちにとって真実なものです。（…）われらのマゴーネはこの大事な真理に気がついており、摂理的なやり方によって皆さんにそのことを紹介したのです。」彼は自分を全面的にマリアに奉献したいと望みましたが、霊的指導者は、「そのような重大な誓いをするには君はまだ若すぎる、と言いました。『でも……』と彼はなおも言いました。『ぼくはどうしても自分を全部聖母マリアにおささげしたいんです。それにもしぼくが自分自身をマリア様におささげしたら、マリア様はきっとその約束を守れるよう、ぼくを助けてくれるでしょう。』」

この聖母への愛のサレジオ教育の伝統を受け継いでいる私たちは、青少年司牧計画におけるこの側面をどのように培うか、真剣に考えなければなりません。若者がふさわしい方法で、ふさわしい機会に、ADMA の若者の次元の表現として、会の精神と生活に全面的に参加するのはまさにそのためです。世界のいくつかの場所で、特にトリノの ADMA で、子どもや若者の多くが ADMA の会員夫婦の子どもであることは、特別な重要性を持ちます：このことは、世代を超えて家庭の状況に心を向けながら、家庭的精神のうちに歩む信仰の旅路の助けになります。人間論的、倫理的な相対主義の様相を呈する社会文化的環境の中で、家庭との親しい絆が、ADMA の使徒的働きの効果と若者の心の効果的な育成のため、また福音にのっとった教育の刷新の可能性のために、真のさらなる価値をもたらすことに私たちは気づきます。実際、両親とそのほかの家族が果たすほかに代えられない教育的役割は、あらゆるキリスト者共同体で認識されなければなりません。互いを結び、子どもたちとを結ぶ愛のうちに、神がすべての人一人ひとりを大切にしておられることを日々表すのは、第一に両親です。

<sup>42</sup> G. BOSCO, *Vita del giovanetto Savio Domenico, allievo dell'Oratorio di S. Francesco di Sales*, in ISS, *Fonti Salesiane. Don Bosco e la sua opera*, LAS, Roma 2014, pp. 1053-1055. ジョヴァンニ・ボスコ著『オラトリオの少年たち』, 聖フランシスコ・サレジオのオラトリオの生徒、サヴィオ・ドメニコ少年の生涯

<sup>43</sup> G. BOSCO, *Cenno biografico sul giovanetto Magone Michele allievo dell'Oratorio di S. Francesco di Sales*, in ISS, *Fonti Salesiane. Don Bosco e la sua opera*, LAS, Roma 2014, pp. 1106-1108. 同上, 聖フランシスコ・サレジオのオラトリオの生徒、マゴーネ・ミケーレ少年の小伝

2018年の若者のシノドスと、若者への手紙の形をとったシノドス後の使徒的勧告『キリストは生きている *Christus vivit*』は、この方向性を示す力強い招きとなっています：愛するように、人生を満ち満ちて生きるようにという呼びかけに気づき、受けとめるよう、若者と共に歩むこと、また今日において「良い知らせ」を宣べ伝える最も効果的な方法を見いだすようにという、若者自身に投げかけられた挑戦です。

若者と共に歩むには、自分が前もって考えた計画を脇に置き、若者たちのいる場で彼らと出会い、若者の時間やリズムに合わせることを求められます；それはまた、自らの生きる現実をとらえ理解しようとする若者たちの葛藤を真剣に受けとめることでもあります。若者は、共に歩んでもらい、助けてもらうことを必要としています。言葉と行いを通して受けた福音が、自らの人生の物語とアイデンティティを構築しようとする若者の日々の努力の一環となり、その努力が効果的なものとなるためです。たとえ明白な、意識的なものでなくとも、常に若者の歩みに含まれる人生の意味の探求の中で。

若者には、自然に大きなエネルギーがあります。動いて表現するスペース、広い展望、応えるための大なる挑戦、計画を立てる未来を必要とします。また、信頼して前進する力を与えてくれる人、エネルギーを、奉仕、あかし、使徒職へと活かす機会を与え、招き、励ましてくれる人を必要とします。スペースを生み出すということは、若者をありのまま受けとめることでもあります。若者のやり方や過ちを受けとめることです。特に、若者が奉仕の体験に力を注いでいるとき、結果を心配したり、高いレベルの“専門性”を求め、そこにばかり集中したりせずに。それは、人間的成長、霊的成長の道のりにおいて成熟していけるよう、一人ひとりを全人的にとらえることを意味します。

## 結び

扶助者聖マリアの会の営みのこの150年に感謝をささげ、サレジオ家族の創立者のカリスマに忠実に歩みながら、聖霊に導かれ、福音宣教と教育の熱意を新たにさせていただくため、献身しましょう。このことは、イエス・キリストへの信仰とマリアへの愛をすべての若者、少年少女、十代の若者、特に最も貧しく最も助けを必要とする（このことを決して忘れないようにしましょう）子ども、若者にもたらすということです。子どもたちがまだ宗教的価値に惹きつけられる大切な年頃にあるとき、その若いときに、この感性を種蒔くことです。そのイエスへの信仰と母マリアへの愛を、多くの友人や家族、仲間、近所の人々、知り合いと分かち合うことです。この福音宣教の熱意に不可欠なのは、家庭と新たな世代に特別に心を向け、人間的絆、すべての人に開かれた心、奉仕の精神を育み、養い、マリアの福音的姿勢を深く自分たちのものとしながら、会を刷新することです。マリアの福音的姿勢とは：神に応える開かれた心、試練のとき、十字架のときの忠実、主のすばらしいわざへの喜びと感謝の精神です。

マグニフィカトの精神のうちに、150年の間にADMAが経験したすべての良いことを感謝し、私たちは歌います。また、実に多くの謙遜な人々の忠実さに感謝します。困難のとき、危機や挑戦のときにもともし火を絶やさずにかかげ、ドン・ボスコから受けた賜物が新たな世代に引き継がれていくようにしてくれました。

トリノの大聖堂の、キリスト者の扶け聖マリアの大きな絵のそばにドン・ボスコの像があり、小さな教会を手を持っています。サレジオ会事業はキリスト者の扶け聖マリアが共におられるものであることを示しています。ドン・ボスコへの忠実は、ドン・ボスコが使徒的な心のうちに大切に抱いた、そしてドン・ボスコのすべての後継者たちが心のうちに大切に抱

いたキリスト者の助けへの信心と切り離すことができません。私たちが再発見し、広めなければならぬ、カリスマの遺産なのです。

「マリアの、この積極的に働きかける母としての存在は、本会の土台であり、神の国に奉仕する会員の献身を照らし導くものです。」<sup>44</sup> ADMA と ADMA の会員であることは、私たち自身の生活・人生におけるマリアの母としての存在と助けの体験に基づいています。目にし、触れ、体験されたこの母の存在は、あらゆる献身、良い意向と行動を力づけ、支えます。マリアは私たちと共におられ、私たちを愛し、守ってくださいます。救われた喜びから輝き出る福音的な奉仕の意識と、福音を宣べ伝え神の国を建設することへの熱意に満ちた献身は、このことから生まれます。主の栄光をたたえ、同時に自らを主の小さなはしめであると宣言されるマリアの模範にならい、マリアに助けられながら。

私たちはまた、マリアの母の愛を体験しましょう。すべての人に差し伸べられるマリアの手となるためです。すべての人が愛の神に近づくことができるように。絶えずマリアにゆだねることは、私たちの霊性の際立った特徴です。マリアにゆだねることは「ゆだねることは、上向きの働きがあります。それは、果たされるべき使命に惜しみなく応えるために、自分を捧げることです。しかし、下降の働きもあります。ドン・ボスコを導いた方、今もひきつづきドン・ボスコに起源をもつ霊的家族を導かれる方の助けを、信頼と感謝のうちに受けることです。」<sup>45</sup>

私たちの教育、福音宣教の使命において強く感じられるマリアの存在は、私たちが「自分たちのこと」を行っているのではなく、自分たちの力だけに頼っているのでもないことの確認、保証になります：私たちは、賜物、呼びかけに答えているのです。常に限界のある私たちの応答に求められる努力と忍耐を担いながらも。最初に福音化された方、最初の福音宣教者であるマリアへの真のゆだねは、私たちにとってカリスマにおける事実であり、自分たちが僕、神の恵みの仲介者であることを意識させてくれます。若者の真実な問いかけ、神に愛されている人々の真実な問いかけにどのように応えたらよいのか、福音宣教の星マリアは、ガリラヤのカナでされたように、私たちを助けてくださいます。そして、御子に目を注ぐよう招いてくださいます：「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」<sup>46</sup>

扶助者聖マリアの会は全サレジオ世界を照らす光であり、マリアと共に喜びの福音の弟子、宣教者となるよう私たちを招きます。会として、家庭、親子、若者や年配の人、子ども、十代の若者たちの参加を巻き込むことのできるその存在に、多くの目が注がれています。ADMA の状況の私の評価は、次のように気づいたことに基づいています。私たちの間で新たな機会が生じるのは時に、既存のプログラムがあるからではなく、生きていくことそのもの、その中の出会いによって求められるからなのです。最も大切なこと、最も切実な必要に光を当てるのは、生活そのものなのです。ADMA の最も貴重な固有の側面は、聖母が共におられ、共に歩んでくださる家庭で生きられる信仰です。これは教会にとって大きな、類ない価値のあることなのです。

最後に、私が心に抱いている深い確信を分かち合わせてください。世界を旅すると、私たちが多大なエネルギーを数多くの取り組みに注いでいるのを目にします。それらを最大限に有意義な活動にするためであり、その多くは社会福祉事業への惜しみない献身です：それはすべて大変価値あることで、常にとてもサレジオ的な取り組みです。しかしながら時に、人々が互いに真に関わる機会が欠けています：神について、イエスについて語る、信仰を祝

<sup>44</sup> ADMA 会則, 第 1 条.

<sup>45</sup> ドン・ボスコのサレジオ家族 アイデンティティー憲章, 第 37 条.

<sup>46</sup> ヨハネによる福音書 2 章 5 節.

い、私たちの支えである信仰を表す機会です。私たちは多くのことについて語りますが、時に、心の深みに根ざす事柄について語らないままです。その意味で、扶助者聖マリアの会は多くのすばらしい要素を備えています。中でも、信仰と祈りは際立っており、これからも優先されつづけなければなりません。家族、子ども、若者と年配の人々が共にいるのを見るのは、すばらしいことです。

この旅の歩みを可能にしてくれたすべての人に感謝します、そして全サレジオ家族、私たちが働くすべての現場を招きます。ドン・ボスコが生きた同じ教育、福音宣教の情熱をもって、この母への愛を育み、広めましょう。主の加護とキリスト者の扶け聖マリアの母としての存在、ドン・ボスコの取りなしに欠けることはないと保証しましょう。特に、全サレジオ家族にお願いします。創立から 150 年がたちながら ADMA がまだないところで、司牧的な工夫をもって創設されるよう ADMA を広めましょう。キリスト者の扶け聖マリアは、すべてを行ってくださるでしょう。

聖ヨハネ・パウロ二世は、サレジオ家族として私たちに語りかけながら、美しい航海図を与えてくれました。「親愛なる教育者の皆さん、皆さんはその働きによって、教会の母としての役割に見事にあずかっているのです。(Gravissimum educationis, 3) 聖霊の最も崇高な協力者、いと聖なるマリアを、常に皆さんの前にするようにしてください。マリアは聖霊の照らしに温順であり、そうしてキリストの母、教会の母とられました。マリアはあらゆる世紀を通して『…母として現存することになりました。“婦人よ、これはあなたの子です”、“この方はあなたのお母さんです”というイエスの言葉どおり…』(回勅『救い主の母 Redemptoris Mater』, 24) 皆さんの目が、決してマリアから離れることがありませんように。」<sup>47</sup>

皆さんのすべてのあかしに感謝します。熱意をもって共に歩んで行きましょう：ゆだね、信頼し、ほほえみましょう！ 神様の祝福が皆さんのうえにありますように！

総長 アンヘル・フェルナンデス・アルティメ神父 S.D.B.

---

47 ヨハネ・パウロ二世, 若者の父 *Iuvenum Patris*.